

設立の旨意（現代語訳）

思い返すとすでに二十年以上も前になるが、幕政の末期、外交が切迫して人心が動揺した際、微力な私ではあったが海外留学の志を抱いて脱藩して箱館に行き、ついに一八六四年六月十四日の夜、ひそかに国法を破ってアメリカの商船に乗りこんだ。

船員となって労働に従事することおよそ一年で、ようやくアメリカのボストンに到着した。幸運にもかの国の博愛心の厚い人に助けられて、アーモスト大学に入学し、続いてさらにアンダーヴァー神学校に学び、前後十年あまり苦学を重ねた。

こうしてアメリカの事物や制度が盛大である様子を見たり、すぐれた人物や人格者に接して意見を聞いたりした結果、アメリカの文明は決して突然にまた偶然に生まれたものではなく、必ず原因があるということを知った。そしてその原因がすべて国民を教化するのに熱心であったことにあるのに気づき、初めて教育が国の盛衰に深く関係するのを確信した。以来ひそかにこの身を教育事業に捧げようと決心した。

一八七四年の末に長年抱いていたひとつの志を胸に秘めて、十年以上ものあいだ夢にまで思い浮かべたわが国に帰国した。

そして一八七五年十一月二十九日に同志社英学校を設立した。これが現在の同志社設立の始まりなのである。

同志社の目的はただ単に普通の英学を教えるだけでなく、徳性を磨き、品性を高尚にし、精神を正しく強めるように努め、ただ技術や才能のある人物を育成するだけでなく、いわゆる「良心を手腕に運用する人物」〔良心の全身に充満したる丈夫〕を産み出すことに努めてきた。しかもこのような教育は、一方に片寄った智育だけでは決して達成できるものではない。

それはただ神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教の道徳によらなければならないと信じて、キリスト教主義を徳育の基本とした。

政府の手で設立された大学が実に有益なのは疑いない。けれども国民の手で設立された〔私立〕大学が、まことに大きな感化を国民に与えることも事実である。学生が自分独自の気質を発揮し、自治、自立の国民を養成する点は、これこそ私立大学が持っている特性であり長所である、と信じて疑わない。

教育というものは人間の能力を発達させるだけでなく、あらゆる能力をまんべんなく発達させるようにしなければならない。いかに学問や技術が優れていても、その人間が意志の弱い人物であれば、一国の運命を担うべき人物とは決して言えない。もしも教育方針の的が

外れているために一国の青年を歪んだ鑄型にはめこんで片寄った人物を養成するようなことがあれば、教育はその国を滅亡させると言うべきであろう。

一国を維持するのは、決して二、三の英雄の力ではない。実是一国を形成する、教育があり、知識があり、品性の高い人たちの力によらなければならない。これらの人たちは「一国の良心」とも言うべき人たちである。そして私たちはこの「一国の良心」ともいうべき人たちを養成したいと思う。私たちの目的は実にここにある。

諺にはこうある。「一年の謀は穀物を植えるにあり。十年の謀は木を植えるにあり。百年の謀は人を植えるにあり」。

思うに私たちの大学設立のような事業は、実に国家百年の大計であり、なんとしてもとりかからねばならない事業である。

私たちのかねての志は以上のとおりである。そうした志を抱く私たちが、他方でわが身を顧みると、ちょうど斧を研いで針を作るのに似ている。とりわけ私のような者はまことに微力で学識も少なく、国家のために力をつくすと公言しながらも内心では少々、気後れがしないわけではない。

けれども二十年間抱き続けた志は、黙殺するわけにはいかない。わが国の時代の急務を黙殺するわけにはいかない。さらに知人や友人の協力も黙殺すべきではない。だから今日の時勢と環境とが好転してきたことを受けて、わが身の微力にもかかわらず私の生涯の宿願であるこの一大事業、すなわち大学設立のために一身を捧げて取り組みたい。神が私たちの志を祝福し、また社会の有識者が私たちの志を助けて、志を実現させてくださることを願ってやまない。

一八八八年十一月

同志社大学発起人 新島襄